

今年使用するインフルエンザワクチンについて

経鼻ワクチンには「痛くない」という大きなメリットがあります。

しかし、接種後に熱が出たときの診断や治療が難しくなること、また喘息発作を起こす可能性があります。

小金井のお子さんたちの健康を第一に考え、安心して診療を行うために、今年経鼻ワクチンの使用を見送ることにしました。

検討理由について、以下にご説明いたします。

経鼻ワクチンは、注射のような痛みがないため、お子さんにとっては受けやすいワクチンです。

一方で、このワクチンは「生ワクチン」といって、弱くしたインフルエンザウイルスを使っています。そのため、接種後には少し注意が必要です。

インフルエンザワクチンを受けたあとに熱が出た場合、

- ・ 本当にインフルエンザに感染して熱が出たのか
- ・ インフルエンザとは関係なく、別の原因で熱が出たのか

を判断する必要があります。

従来の「注射するタイプ」のワクチンは、不活化ワクチンなので、ワクチンが原因でインフルエンザにかかることはありません。そのため、発熱したときにはインフルエンザの検査を行って判断することができます。

ところが、経鼻ワクチンでは、接種したワクチンのウイルスが鼻の中に残っている間、インフルエンザの検査が陽性になることがあります。

(この文章の最後の①を読んでください)

つまり、検査が陽性になっても、

「本当にインフルエンザに感染したのか」

「ワクチンのウイルスに反応して陽性になっただけなのか」

を区別することが難しい場合があります。

そのため、接種後に発熱した場合、インフルエンザにかかっているかどうかを確実に判断できないことがあります。

さらに、インフルエンザの治療薬を使用すると、せっかく接種した生ワクチンの働きが弱くなる可能性もあります。

実際に昨年、経鼻ワクチンを接種した翌日に発熱したお子さんがいました。
本当にインフルエンザにかかっていたとすれば、まれではありますが、重症化して脳症などを起こす可能性があります。一方で、治療薬を使えばワクチンの効果に影響する可能性があります。
保護者の方と十分に相談したうえで、非常に悩ましい判断をすることになりました。

#喘息のお子さんにも注意が必要です

また、気管支喘息があるお子さんでは、経鼻ワクチンによって喘息の発作が起こりやすくなる可能性があります。そのため、喘息の患者さんには経鼻インフルエンザワクチンは推奨されていません。(この文章の最後の②を読んでください)

実際に昨年も、
「接種した日の夜から喘息の発作が起こり、一晩中つらかった」
「接種後から発作が続き、病院を受診した」
というお子さんがいました。

「痛くない」ということだけでなく、接種後に熱が出た場合にも、できるだけ正確に診断し、必要な治療をすぐに行えること。
それも、お子さんたちの健康を守るうえで大切なことだと考えています。
ご理解いただけますと幸いです。

- ① 「海外で実施された経鼻弱毒生インフルエンザワクチンの臨床試験において、接種 25 日後にもワクチンウイルスが検出されたことから、本剤接種4週間以内はワクチンウイルスが残存している可能性がある。」「本剤接種後一定期間は、本剤由来のワクチンウイルスがインフルエンザの迅速検査で陽性反応を示す可能性がある。」と経鼻ワクチンの添付文書に記載されています。
- ② 経鼻ワクチンの添付文書に「接種要注意者：重度の喘息を有する者又は喘息の症状を呈する者」と記載されています。また、日本小児科学会の『経鼻弱毒生インフルエンザワクチンの使用に関する考え方』には「特に喘息患者には不活化インフルエンザ HA ワクチンの使用を推奨します。」と記載されています。また、「米国では、喘息又は喘息の既往歴のある2～4歳児への接種を推奨していません」との記載もあります。

2026 年 9 月

すず木小児科・アレルギー科
院長 鈴木 啓文